

# 都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

## 著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

## 論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

**都留文科大学附属図書館**  
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号  
電話: 0554-43-4341(代)  
FAX: 0554-43-9844  
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

# ソビエト児童学と民族調査

Soviet Pedologiya and Studies of Nationality

福田 誠 治  
FUKUTA Seiji

はじめに

近代化を遂げようとしていたロシア、ソビエトでは、多民族国家であることをどのように意識し、そこから派生する諸問題をどのように解決したのか。ソビエト児童学という分野を通しながら、そのことを検討してみたい。

遠征調査など民族調査の扱いは、政治的な問題が絡んで、ソビエトにおいても、したがって日本でもほとんど検討されてこなかった。ゆえに、先行研究もわずかである。本稿では、民族調査の様子を再構成しながら、ソビエト児童学が人間の能力、その発達、民族文化の特質などをどのように理解したのかを探る。

その一部として今回は、北バイカルの調査と、モスクワにおけるタタール人の調査などを再構成しながら、ソビエト児童学が投げかけた問題を総合的に考えてみることにする。

## 1. ウズベク調査

この起こりは、ある一つの研究だった。革命後のソ連邦で、少数民族の知能研究として特に広く知れ渡ったのは、ウズベキスタンにおける知能研究である。この地域には、帝政ロシアの医学がそのまま残り、ある勢力を保っていた。タシケントでは1927年から1931年まで、『ウズベキスタンの医学思想』誌が発行され、そこには多くの知能研究あるいは心理研究が発表された。

タシケントで学校・予防実験室にいたシュチレルマンは、1925 - 1927年に、ウズベク人生徒4000人を対象にして、ビネー＝シモン式テストとロツソリーモ式テストを用いて知能の研究を、およびまたアンケートを用いて世界観の研究を行なった。

彼の達した結果は、「極めて低い知能」であった。彼は、ウズベク人の子どもの心理を未開（ ）であると考えた。未開人の心理に特有な諸特質、つまり、「視覚的記憶は優れ、感受性と観察力が大きい、抽象的な性格の能力や知的過程が完全に欠如している」とシュチレルマンは説明し、「興味の狭さと情緒的な無気力は、ウズベク人の子どもたちに特有の性質である」と解明する。心理のタイプがこうなので、生徒の90%は商人が職人を希望し、10%が軍人や事務職員を希望しているにすぎないという。ここに生徒自身の理想の限界性が生まれていると、シュチレルマンは分析した。

1928年の論文では、シュチレルマンは、別のウズベク人生徒（8 - 15歳）164人の知能を調べ、ロシア人生徒およびウクライナ人生徒と比較している。

被験者は、文と絵がウズベク人に身近なもので理解できるような修正されたロツソリーモ式テストで検査された。シュチレルマンは、ウズベク人の子どもの知能水準は、標準素質（ ）が16.8%、軽度の遅滞（ ）が63.4%、重

度の遅滞（ ）が19.8%である（標準集団の2 - 3%は知的遅滞である）と発見した。この素質基準によると、ロシア人少年の知能は、ウズベク人少年の2 - 5倍高いことになる。さらに、12 - 14歳に向けては、ウズベク人の子どもの知的素質（ ）は低下していていることも指摘した。ウズベク人生徒とウクライナ人生徒の知能を比較すると、「ウクライナ人に比べて、重度の遅滞のウズベク人少年は8倍、少女は1.5倍多い」という結果になった。

シュチレルマンは、ウズベク人の子どもの未開性、知的遅滞の原因を、生理学的発達と社会・生活条件との特性にあると考えていた。彼が目じたのは、新生児が2歳に至るまで縛り付け寝かされるというウズベクの揺りかごである。これが知的発達に対して否定的な影響を与えているのだと、彼は考えた。決して、民族固有の遺伝的特徴と考えていたというわけでもない。

だが、シュチレルマンが、能力と同等の意味で「素質（ ）」という用語を使用していることでも分かるように、彼の研究は生物学的な要因を強調しているかのような印象を与えるものであった。

シュチレルマンの研究は、注目すべき異なる二つの反応を引き起こした。一つは、共産党幹部の激しい反発を生んだことである。モスクワからウズベキスタンに向けて、心理学者レVENTゥーエフが派遣された。彼は、後の1932年に、シュチレルマンのことを「ウズベク人の子どもたちを深く傷つけ、彼らを一面の白痴大衆、知的遅滞者に変えてしまった」と非難した。

もう一つ、シュチレルマンの論文に対する反応は、児童学にも深刻な課題を投げかけることになる。ヴィゴーツキーは、レVENTゥーエフとは違って、発達の可能性ならびにその法則を指摘できるような科学的な研究の必要性を痛感する。論文『少数民族の児童学に関する科学研究活動計画の問題』は、そのような問題意識で書かれている。シュチレルマンの引き出した上記の結果を、民族名も研究者名も伏せて引用し、「誤って設定された研究データによって、民族全体には基準素質の6分の1しかないということだけしか分からないというような仕事に行き着いてしまった」と述べている。

心理学史の研究者クーレクの指摘では、その後、このことがきっかけで、ヴィゴーツキーとルーリヤはソ連邦で民族心理学の開拓者と目されるようになるまでになったのだという。ルーリヤの中央アジア遠征調査がウズベキスタンの地を目指したのは、決して偶然ではなかった。

## 2. 少数民族調査と児童学

ヴィゴーツキーは、『子どもの文化的発達の諸問題』（『児童学』誌、1928年第1号）にて文化・歴史理論を世に問い、『少数民族の児童学に関する科学研究活動計画の問題』（『児童学』1929年、第3号）にて少数民族の子どもの発達研究を、研究課題の正面に据えた。その後、彼は「民族児童学協議会」の心理学界代表となっているほどである。

基本的な争点となる遺伝と環境の問題に関しては、『少年期児童学』（1929年）によって彼の考えは明確に示されていた。すなわち、児童学の課題を、子どもの発達に関する学問（科学）と位置づけ、子どもの発達を条件付ける要因、遺伝と環境との関係、生物学的要因と社会的要因の相互関係に一定の見解を表明したのである。

子どものすべての心理的・文化的発達、外から条件付けられるが、主として大脳皮質の中に、皮質を通して成し遂げられる。「人格発達の社会的条件付けを第一義に置くマルクス主義児童学」にとっては、発達における大脳皮質の役割の問題は基本問題なのである。このように、ヴィゴツキーは、遺伝と環境の両者を関連付けている法則を解明しようと考える。「子どもの発達過程は生物的要因と社会的要因とを考慮する場合においてのみ、科学的に認識されうるし、探求される」こと、「二つの要因の複雑なる相互作用、相互の組合せ」が、「子どもの発達の特殊な固有性を条件付けるような、もっとも本質的な特徴である」ということを、ヴィゴツキーは確認する。つまり、遺伝と環境との「相互作用」に着目するわけである。この「二つの要因の間に存在する複雑な相互作用の分析」を解明すること、これが児童学に義務付けられている課題であると解釈している。

そして、社会の変動期にこそ、その複雑な相互作用を解明する資料が得られるのではないかと、ヴィゴツキーは考えたと思われる。

ヴィゴツキーは、論文『少数民族の児童学に関する科学的研究活動計画の問題』のなかで、児童学の研究計画の質と組織を具体的に提案している。

「この5カ年計画とそれ以後の年は、多様な民族の多くが急速に文化的発展を遂げるという経験が、歴史的に未曾有のものである」という歴史認識のもと、文化発展に寄与すべく「子どもの発達の法則と筋道に関する学問」を具体化しようというのである。

彼が提起した視点では、知能テストなどを、民族語に訳しさらには地域の身近な例に置き換えたとしても、それで発達を把握したことにはならず、「根本的には少しも変更されない」という。言い直せば、ビネー＝シモン式知能テストをロシア版に修正し、それをまた少数民族版に修正しても、それで測定できる知能では改革の道が見えてこないという解釈である。ヴィゴツキーが一例としてあげたものが、先のウズベクの例であった。

確かに、このような研究は、「まったく公平に、知的素質のこの低迷状態は、教育荒廃、ならびに文化・生活的特性を伴う環境の抑制的影響との結果なのだ」と指摘しているが、ヴィゴツキーはこれでは不十分だと考える。

子どもたちは、ある民族の「歴史的発展という複雑な道」と、「現時点で実現されている経済的、文化的な諸条件という複雑なシステム」とが反映した、「きわめて特有の文化・生活環境」の中で成長し発達する、と彼は指摘する。それ故に、児童学の第一の課題は、「この特殊な文化的・生活的な形態から孤立したり分離したりせず、何よりもこの特性を背景にして、この特性と結びつき、この特性との生きた相互作用のなかで、少数民族の子どもを研究すること」であると彼は規定する。

それは、「少数民族の子どもに関する児童学的性格づけを否定的なものから肯定的なものへと変更することとも言うことができよう」と言い換えて、固有の環境の存在を認め、そこからから出発して発達の筋道を探ろうとしているかのようである。

そのためには、先ず、環境の特性を知らなくてはならないと、ヴィゴツキーは考えた。この研究「計画の切り口」を決める「第一の、もっとも重要な要素」は、「研究の中心に環境の解明を据えるということである」という。「子どもの全面的な発達において特殊な特性を決める基本的で中心的な要因は、ある環境の構造である。」「最重要位にあるのは、人間の型への生物学的な分類や人種特性ではなくて、まさしく社会環境の形成的影響なのである。」

彼の論理では、環境は、個々の子どもに特殊な体制として「子どもの前に適応すべき固有の課題」を提起し、「発達過程で子どもが身につける思考と行動の手段を、基本的に決める」ものであり、「遺伝的な素質が会う訓練と発達の可能性をも、基本的に決めている」ものなのである。

この例として、ヴィゴツキーがあげているのは、ムスリム諸民族の例である。ムスリムたちは、何百年もの間、あらゆる造形活動、あらゆる絵画が禁止されてきたので、これらの民族の子どもには、「すべてのヨーロッパ諸国の就学前児に特徴的な造形機能の完全な発達は期待できない」。また、「鉛筆に出会ったこともない民族は、もちろん書き言葉の発達という分野で遅れがみられる」と、指摘する。

研究「計画の切り口」を決める第二の要素は、「心理機能の文化的発達の計画を明らかにすること」である。少数民族の子どもの特殊性は、先ず第一には、「素質の特殊性」によって条件づけられるのではなく、「環境の特殊性」によって条件づけられるのである、こうヴィゴツキーは指摘する。安易に「素質の特殊性」にたよった研究例の説明として、先の引用、「誤って設定された研究データによって、民族全体には基準素質の6分の1しかないということだけしか分からないというような仕事に行き着いてしまった」が入ってくることになる。

ヴィゴツキーの立てた計画をどのように実現するか。そこで、1931 - 1932年に、ルーリヤとその同僚たちがウズベキスタンに科学的遠征調査を行なうことになった。これについて、ルーリヤは、ドイツの心理学者ケーラーに手紙を送り、「中央アジアにおけるソ連邦で最初の心理学的研究」という自負を表明したといわれる。ヴィゴツキーもルーリヤへ手紙を書き、この研究が「世界的に有名になるだろう」と期待を述べているようだ。ケーラーは、1回目の遠征調査に参加することになる。中央アジアへのルーリヤの、アルタイへのザポロージェツの科学的遠征調査は、このような歴史的脈絡のなかでとらえられる。

そして、ヴィゴツキーとルーリヤは、ウズベキスタンの社会主義的な発展がウズベク人の心理の未開性( )を一掃すると考えていたことも、ここでは留意したい。

さて、児童学界の意識の盛り上がりのなかで、1929年に教授法研究所は、教育人民委員部の指令に基づき、教育人民委員部少数民族局および全ロシア共産党中央委員会付属北方委員会の援助を得て、二つの児童学的遠征調査を組織した。発案者はザルキント、知能テストを含む調査方法の作成はシュバートが行った。調査の一つは、北バイカル地域でツングースを対象とする。もう一つは、アルタイ山地でオイロートを対象とする。同時に保健研究所からも一つの遠征調査が、文化人類学的データを求めてブリヤート=モンゴル自治共和国に向けて派遣された。さらに、1931年と1932年には、中央アジアにおいてルーリヤたち文化・歴史学派の心理学者たちが大がかりな調査研究を行うことになったのである。

### 3. ツングース調査

ツングース遠征は、1929年6月から8月にかけてバイカル湖北で行われた。対象地域は、ブリヤート=モンゴル自治共和国の北バイカル地区と呼ばれるところであり、地区の中心はバイカル湖北岸のニージニイ・アンガルスク村である。

遠征調査は、第二モスクワ国立総合大学教育学部児童学科の3年生の学生3人で行われた。遠征調査に参加した一人は、かつてこの地区のツングース学校で教師をしていた女性である。さらにまた、休暇でレニングラードから帰省しているツングース人のラブファーク学生と出会い、アンケートをツングース語に翻訳する際に助けを受けている。

調査団に同行して、同じ地区に、北バイカル地区における経済、およびソビエト活動と文化活動の調査を任務とするブリヤート・モンゴル共和国から委員会がやってきた。調査団はこの委員会から、さまざまな便宜を図ってもらうことになった。彼らは、「執行委員会、協同組合、教育行政職といった地域の組織の代表からは、とても親切に扱われた」と報告している。

ニージニイ・アンガルスクは、大きな村である。低地で、じめじめして、不健康な土地である。村から3キロメートルの所に山地があり、森が広がる。山頂には6月でも雪があり、7月初めに雪は急速に解け、川は氾濫するが、8月末には再び山に雪が降る。森には、毛皮獣、いちご、杉の実がある。バイカル湖やそこに注ぐ川には、たくさんの魚がいる。自然の富に応じて、住民の仕事は、漁業と狩猟となっている。ロシア人住民は分散して、農業に従事している。この農業は、きわめて生産性が低く、「この地区の住民は、農業を確実なものにしていない」。林業は全く発展しておらず、ましてや木材加工作業場などない。魚に必要な包装は、他の地区からもってきている。

住民は、ロシア人と、ツングース人(二つの遊牧民と一つの定住民)である。3族合わせたツングース人の人口は730人で、うち16歳未満のものは253人である。定住生活をするツングース人は、ロシア人とは離れて住んでいる。ロシア人住民は、地区の4地点および地区の中心アンガルスクに集中している。アンガルスクには、地区のあらゆる生活が集中しており、地区執行委員会、協同組合連合、地区学校、農村図書室( )が存在する。地区の病院は、8キロメートル離れたドゥシュカチャンにある。

ツングース人は、山地、河畔、定住の三グループに分けられる。調査の初めは、アンガル上流のチリチギール族を対象とした。主として河畔のツングース人である。山地のツングース人は、アンガル上流から180キロメートルの野营地がある。彼らには、10人の学齢期の子どもがいたが、川の氾濫期にそこに到達するのは不可能だったので調査は断念された。

子どもたちを調査する場合に、調査者にとって主要な困難は言語であった。アンケートは、ラブファーク学生の手でツングース語に翻訳された。調査中によりやくいくつかのツングース語を覚え、調査者がツングース語で質問をすると、「調査は容易になった」。調査者がツングース語を使用することは、子どもや両親を安心させ、彼らに近づくことができたからである。

#### 調査家族の社会・生活環境

調査対象の子どもたちは、41家族、61人にあたる。4家族は調査ができなかったため、データは37家族のものである。これらの家族のツングース人は、総勢203名に相当する。うち成人が49%、17歳未満の子どもが51%である。子どもたちは男子145、女子108に分かれる。1家族あたり子どものもっとも多い家庭は6人、平均2.7人であった。

子どもの死亡をみると、遊牧家族では1家族あたり生存児童が平均3.3人、死亡児童3

人である。山地家族では、生存児童2.6人、死亡児童3.3人である。これらの数字から、ツングース人の子どもの死亡率は大きく、「それは生活様式と切り離せないようだ」と結論付けられている。しかし、この調査もあいまいなもので、たいてい父も母も、自分の歳も子どもの歳も正確には知らなかったからである。

この調査対象となった山地ツングースの13家族と、河畔ツングースの24家族は次のようになった。前者は、半径500 - 600キロメートルというトナカイの遊牧半径をもった遊牧民である。彼らの仕事は、狩猟である。後者の河畔ツングースは、山地ツングースと同じ種族であるが、主として河畔に住む。彼らは、狩猟の他に、漁業も行い、菜園を作ることまでできる。彼らは、冬は木造小屋に住み、夏は小屋から遠くない所のテントに住む。狩猟に出るのは、夫だけで、家族は家に残っている。

#### 衛生条件

遊牧ツングースと河畔ツングースの妻たちは、個々のテントの中で「きわめて非衛生的な条件」の下に子どもを生んでいる。

山地ツングースの子どもたちは、出産の際、湯をまったく使わない。このような非衛生的な諸条件が、彼らの子どもの大きな死亡率に少なからぬ影響を及ぼしていると、調査者には思われた。

子どもたちは何を食べているのか。パンの他に、ツングース人はクッキーを必要とする。砂糖やトナカイの乳を入れた濃いお茶とレピョーシカが、家族の誰もと同じくツングースの子どもたちの主要な食べ物である。お茶は、日に5、6回飲む。

こどもや大人、とくに男性の眼球白濁をよく目撃した。医師助手の説明では、猟師の職業病であり、目が木の枝で打たれるかららしい。

ツングースの子どもたちの大部分は、煙草を吸ったり嗅いだりしている。61人に子どもの喫煙について尋ねたところ、否定したのは27人だけだった。よく目にしたことだが、父や母が3、4才の子どもの口に紙煙草を突っ込んでいた。山地ツングースの大人たちは、男も女もだれもが吸っている。

しかし、定住ツングースの女性は、喫煙せず、子どもの喫煙にも否定的である。こうして、定住は、子どものニコチン中毒を減少させている。

アルコールは、現在のところ、ツングースの間に全く広がっていない。

子どもたちの衣服は、とりわけ定住ツングースでは、土地のロシア人の子どもと変わらなかった。しかし、下着については、61人の子どものうち、毎週取り替える者が36人、決まっていないが25人である。着替えないという例はなかった。風呂に入るのは、毎週が29人、決まっていないが16人、入らないが16人である。

#### 子どもに対する家族の態度

ツングースの子どもたちへの関係は、いつもやさしく、とても安定している。小さな子どもには、とりわけ愛情が注がれる。

うまくいくと、男の子の場合には、12歳で自立した猟師になる。

狩猟における自立は、あらゆる他人からの自立と独立を引き起こす。男の子は、これ以上父母との同居を望まない。山地ツングースの子どもたちは、学校からも逃走してしまう

が、彼らの親はそれを引き止めたりしない。これは、遊牧民の生活の慣習であるようだ。ツングースの女の子は、14、15歳ともなると、もう様々な刺繍が縫える。

#### ツングースの子どもの社会・政治環境

子どもに対する家族の宗教的影響の関係は、「全く無いといえる」と報告されている。ツングース人の宗教観は、キリスト教とシャーマニズムの混合である。今日では、ツングースにはシャーマンがいない。老シャーマンは死に、新シャーマンは現われないと、彼らは言っている。教会は閉鎖され、1926年以降はツングース人の同意を得て、必要ならば病院に運ばれる。

正教の影響は、外的な慣行の偏見にだけ残っている。どのユルタにも、いつもイコンが置かれている。多くの子どもは、十字架を身につけている。子どもたちは、食事の後で時々十字を切っているのだが、祈禱書は知らない。

家庭における子どもは、「完全な資格あるメンバー（ ）」である。子どもは、早期に自立し、早期に大人と協同生活を始める。ツングースの家庭における子どもとの一般的関係は、「健全である」と調査者のシェボヴァローワは評価している。調査者が、都市化された近代的生活にある発達とは異なる別の文化のあり方を認めている点で、注目される。

#### 学校と文化施設の様子

北部バイカル地区には、たった2つの農村読書室、2人の勤務員がいる役所、3つの学校、しかもロシア人向けの2つの1教室学校と、1つの4教室学校であるが、これらがロシア人と並んで少数民族にサービスしているのである。

大きなセンターから隔離しているために、ツングース人の文化水準は、識字率の点からするとき極めて低い。ロシア人では男性の識字率が43%、女性が32%である。しかし、ツングース人は、9%である。しかも、これは、学校の生徒や、夏期トゥーゼム 識字拠点（ ）を訪れる青年をあてにしている数字である。

地区の文化・啓蒙活動の中心地は、ニージニイ・アンガルスクのトゥーゼム地区基礎学校である。1927年時点ですでに30年が経過しており、現在はツングース人住民の民族ソビエトで設立し維持されていることになっているが、自立したトゥーゼムの学校である。この間、学校には寄宿舎がなかったので、学校がトゥーゼムのすべての子どもを取り込むことは不可能であって、トゥーゼム人の生徒の数は非常に少なかった。1926年に、この学校に寄宿舎が開設された。定住の湖畔ツングースのせいで、生徒の数は少し増えた。

トゥーゼム学校は、今では、学校は4年制で、どの学年にも1人の教師がついている。

学校の建物は極めて粗末で、廊下はなく、「薄暗く、湿っぽく、不潔で寒かった」。学校のあらゆる生活は教室で行なわれたが、そこは換気がなされなかった。地区の学校の予算は大きく低下し、1927年で2万5490ルーブリ、1928年で2万4370ルーブリといった具合である。その一方で、教室は拡大し、5年生が開設され、寄宿舎の定員が増員された。

「外的環境の貧困、単純な形態の地域産業」は、子どもたちの経験をあまり豊かにしない。「原始的な実験室」もなく、「観察する用具も器具」もないので、学校は初歩的な実験・研究的方法さえ奪われており、しかも学校の生活から見学までも排除されている。学



校の授業の方法は、4年生に至るまで、「子どもの積極性をわき起こさせるような刺激もない教室の中で」行われている。こうして、「ソビエトの労働学校は、形式的な知識と低レベルの方法の学校に変質している」のである。学校は、主として、「ことばの教授によって組織されている」。

教師の学歴は、4人のうち3人は中等教育を終えているが、1人は10年の勤続年数があるけれども中等教育は未修了である。

それなのに、「学校の塀の外では、たくさんの活動をする。活動家や、あらゆる学校の高学年生徒は、地域の組織と緊密に結びついた、膨大な社会活動を実践している」。

プリアート教育人民委員部の指導は、欠如しており、「この何年か、学校には誰も来ていない」と、調査者は指摘している。

調査者ウーソフが見た学校は、革命がもたらすはずの労働学校とはまるで違っており、劣悪な勉学条件だったのである。そればかりか、学校の中で労働教育らしいものさえないのに、学校の外では教育と縁のなさそうな労働が強制されている。革命後、10年を経ても、これが社会主義的学校の実態の一面であったのだ。

寄宿舎学校の日課は、7時に起床、ベッドを整える。9時から2時まで、昼食をはさんで課業。2時から7時まで自由時間なので、子どもたちは授業の準備をする。8時に夕食、就寝。8時にお茶（朝食）12時に昼食、4時にお茶、8時に夕食。食事の基準は、100グラムの肉、400グラムのパン、50グラムの砂糖とバター。

学校で学んでいる子どもの中には、トゥーゼム人はあまりいない。1928/29年度には、19人のツングース人が学んでいたが、この数は16歳未満のツングース人全体の7.5%しかない。毎年学年度末になると、通学するツングース人の数は減少する。（表1参照）3月か4月初めになると、トナカイの放牧に出かけてしまうのだ。

表1 1928/29年度におけるツングース人生徒の在籍者数

|       | 年度始め | 年度末 |
|-------|------|-----|
| 1年生男子 | 6    | 4   |
| 女子    | 4    | 2   |
| 2年生男子 | -    | -   |
| 女子    | 5    | 3   |
| 3年生男子 | 4    | 2   |
| 女子    | -    | -   |
| 合計    | 19   | 11  |

出典)『児童学』1930年第2号、189ページ

ツングース人の子どもはピオネールを作っている。学校には、15人からなるピオネール班がある。残念なことに、十分な指導を受けていないので、「学校の中でも住民の間でも権威はない」。

民族対立については、寄宿舎でも、学校でも、街角でさえも、教師は反目を見たことがない。アンケートの質問で、ロシア人は優しいですか（ ）と聞くと、どの定住生徒も「優しいときも、悪いときもある」と答えた。

どの教師も、ツングース人生徒は学校で学力（ ）を習得する高い能力があると考えるようになっている。

1年生の3月にツングース人10人の子どもたちを調査したところ、学校の全学力の成績はロシア人生徒に比べて低く、ロシア人生徒の10～37%の学力である。

調査者は、「学校の民族混合構成は、かつて両方の民族とも古い世代が抱いていたような、民族的反目を減少させる」と、このような民族共存状態を高く評価している。しかし、調査報告には、学校のなかの民族言語の存在形態や、教授言語がロシア語で行われて不都合がないのかとか、少数民族の子どもたちが発達の手助けを負うことはないのかという点につき、全く触れていない。そのような問題意識が、調査者にはなかったようである。

#### 子どもの認識能力の発達

ツングース人の子どもたちの認識能力を研究するにあたって、調査者ブルーノフは次のような二つの課題をたてている。一つは、ツングース人の子どもの人格の特性を、できる限り詳細に検討することである。もう一つは、「われわれよりも未開の（ ）文化条件で育っている子ども」を研究する方法に関してより広い結論をいくつか引き出すには、どのような方法が目的にかなっているかを説明するためである、という。

調査対象者は子ども・生徒の19%と識字拠点生徒（ ）の14%というもので、それほど多くはなかった。調査は、年齢7～17歳のツングース人61名、うち女31、男30人であった。

種子の発芽に関して、「種をまく」と82%が正しく答えた。75%が、バターは牛乳から作ると答えた。

「工場」では「商品が生産される」と聞いたことがあるのは、学校の生徒と識字拠点の生徒との18%であった。

金属の産出については、「地中から」採取するとトゥーゼムの子どものほとんどは答えたのだが、わがモスクワの小さな子どもたちは知らない。

さまざまな物について調べてみた。石鹸を知っている者は85%、歯ブラシは86%、秤は90%、時計は95%、ミシンは98%、……電灯は55%であった。正答率が高いのは、協同組合で売られていてツングース人の中で欲求が高いことと、もう一つには彼らの「観察力」のせいであると、調査者は評価している。町の協同組合やロシア人居住地で1、2度見かけただけでも、しっかり見ているのだという。

秤の単位については、大部分の子ども（83%）が知らなかった。彼らは、キログラムとかグラムを知らないのである。学校生徒のほんのわずか（6 - 9%）が、正しく答えた。時計を知っていても、時間の単位は知らない。4%の子どもだけが、何時か読めた。

他の国や民族について、国、都市、湖、川、山などを聞いた。他の国について知っている子どもは極めて少なかった。94.6%が他の国を知らなかったのである。他民族については、ロシア人とツングース人に他に、ブリヤート人がいると答えた者34%、中国人25%、ヤクート、モンゴル、サモエド、朝鮮、チュクチを答えた者は2、3%であった。日本、ユダヤ、タタール、ドイツ、イギリスについて聞いたことのある者も同様にわずかであった。

ソ連邦のイメージは、はなはだあいまいである。ことばを知っている者は20%、ことばを説明できる者は5%。しかし、「わがソビエト政権は他の政権よりも素晴らしい」と答えた者は、46%。その半数は、ソビエト政権が「ツングースを援助し」「何でも与えてく

れる」などと答えた。レーニンについては、彼は「何でもできた」と子どもたちは語った。レーニンの肖像を見た者は、89%。

「男と女のどちらが優れているでしょう」と聞くと、男子の92%は、「男の方が優れている」と答えた。その理由は、「男の方が大きくなる」とか「じいさんはうまく仕事ができるのにばあさんはできないから」といったものであった。女子の66.6%は、女の方が優れていると答えた。

「家族の誰かが病気になったときは、どうしますか」と聞くと、64%が医者によぶと答えた。シャーマンによぶと答えたものは、10%。トナカイが病気になったときには、医者によぶと答えた者は41%、シャーマンによぶと答えた者は23%であった。

ツングース人の子どもたちが人間と動物を使い分けしていることを分析した点で、この調査結果は、興味深いものがあるだろう。

調査者が、シュバート編ビネー=シモン測定尺度を用いて知能指数をはかると、ツングース人の子どもたちの知能は「年齢とともに低下することがわかった」という。結果は次の通りである。(表2参照)

表2 年齢別知能指数の推移

| 年 齢      | 知能指数 |
|----------|------|
| 10歳男子生徒  | 80   |
| 10歳男子非生徒 | 74   |
| 10歳女子非生徒 | 71   |
| 12歳男子生徒  | 66   |
| 13歳女子生徒  | 67   |
| 15歳女子生徒  | 55   |

出典)『児童学』1930年第2号、203ページ

この原因を、調査者ブルーノフは、「学校文化( )が不十分であるか、全く欠如しているので、かなり得点が減少するのだ」と理解している。

さらにまた、調査者は、「言語的な指示を必要とするテストから最悪の結果が出されているので、実物テスト、たとえば絵を描かせたり、絵の欠落部分を指摘するなどすればもっと良く解決するだろう」と指摘して、テストの文化的な不十分さを指摘している。ただし、「これらの結果はツングース人、したがって多くの未開民族の特性と関連している」ということばで、総括している点は注意を要するだろう。

#### 4. プリヤート調査

1929年夏にプリヤートの東部集落の一つで子どもの研究が実施された。この調査は、保健研究所( )のプリヤート=モンゴル研究遠征調査である。

プリヤート=モンゴル自治共和国は、1923年に、旧イルクーツク県と旧ザバイカル州とから分離してできた。面積は、40.3万平方キロメートル。人口は、53万3千人である。都市の人口比率は9%。都市は、3つである。農村の人口は、プリヤート人が52.5%、ロシア人が46.5%である。「プリヤート=モンゴルは、工業化されていない国である」、これが調査者の抱いた印象である。ちなみに、日本は、37.8万平方キロメートル。

革命後、急速に文化が進展し、それは次のような文化施設数の推移を見てもわかる。

(表3 参照)

表3 プリヤートの文化施設数の推移

|        | 1925 / 26年度 | 1927 / 28年度 | 1928 / 29年度 |
|--------|-------------|-------------|-------------|
| 子ども広場  | 11          | 15          | 17          |
| 子どもの家  | 2           | 4           | 4           |
| 初等学校   | 413         | 480         | 504         |
| 7年制学校  | 8           | 11          | 9           |
| 中等学校   | 6           | 7           | 8           |
| 農村青年学校 | 5           | 7           | 9           |
| 農村読書室  | 65          | 75          | 87          |
| サークル   | 12          | 12          | 2           |
| 映画館    | 5           | 11          | 12          |
| 中等専門学校 | 2           | 2           | 3           |

出典)『児童学』1930年第2号、236ページ

大半の家庭には、こどもが2、3人いる。死亡率は、乳児期で37.5%である。半遊牧民が夏の仕事をする夏小屋とか、ユルタは、「極めて狭く、気温の変動が激しく、最低の住設備すら欠いており、泥にまみれ湿気が多い」と衛生条件の悪いことが指摘される。「唯一この住居が優れているのは、換気がよい点で、それは壁が穴だらけであることによる」。それでも、調査者グラナトは、「プリヤート人の子どもは、あらゆる点で、ロシア人の子どもより健康状態は良かった」と結論付けている。この原因は何かと考えて、調査者は、「非合理的」飲食があるけれども、「プリヤートの生活にあるその他の肯定的な要因が埋め合わせをしているようだ」と判断する。

総じて、「生活における保健・衛生習慣の欠如」が、多くの病気の原因となっており、プリヤート人の「一般的な文化的遅滞」が子どもや青年が「文化的能力( )を欠く原因」となっていると、明確に指摘している。

身体発達について、アギンスクにあるプリヤート人学校とロシア人学校の生徒の発達を比べて、調査者は次のような結論を得ている。(表4 参照)

表4 プリヤート人とロシア人の子どもの身体発達状況

|    | プリヤート人の子ども全体 | 学齢期の子ども | 9歳のプリヤート人の生徒 | ロシア人学校の生徒 |
|----|--------------|---------|--------------|-----------|
| 良好 | 47%          | 39      | 17           | 7         |
| 普通 | 30           | 29      | 34           | 30        |
| 不良 | 23           | 32      | 49           | 63        |

出典)『児童学』1930年第2号、245ページ

このうち、プリヤート人学校の生徒にみられる発達不良は、「学習のために締め切った部屋で過ごし、さらに学校付属の狭い寄宿舎で過ごすからである」といい、学校や寄宿舎の劣悪な条件を批判している。

この調査は、プリヤート人の住環境が劣悪であり、文化環境は劣っているが自然環境のせいで健康であるという、おもしろい評価を与えている。

## 5. タタール調査

この調査は、遠征調査ではなく、モスクワにおける少数民族の状態を調べたものである。この調査と、他の調査とを比較すると、同じ少数民族であっても都市と農村という生活環境の違いのもつ意義が理解できる。

### 身体的発達について

この調査は、1927/28年学年度に、「文化人類学的測定」を用いて、モスクワの48番学校と27番学校という2つのタタール人学校で実施された。

対象者は410人である。身体の状態(体重、身長、座高、胸囲、肺活量)が測定されたが、その結果は、タタール人は8、9歳で標準に比べて劣る傾向にあった。体重では、ほとんどの年齢で、タタール人はロシア人の平均を超えていた。とりわけ、15、16、17歳の女子では、タタール人の方が大きかった。

### 知的発達について

調査者たちの立てた調査目的は、「生徒の学年再配置( )という課題で学校教育者を援助すること」と、子どもの「個人的課題」を遂行する際の「教育者を援助すること」、それによって「子どもの知能や、学年や学校の水準という一般的概念を与えること」である。当時の児童学者たちが、児童学の意義をどのように自覚していたかということを知ることができよう。

使用されたテストは、ポルトゥーノフ教授編集のビネー式集団テストである。全ての問題は母語に翻訳された。

調査は、1928年秋に、5学校24クラスで実施された。対象となったのは、2～7年生、男子193人(52%)、女子176人(47%)、合計380人であった。

当時のソビエトでは、学年はグループ( )と呼ばれ、年齢で区切られていたわけではない。革命によって就学が促されたため、実力のよくわからない子どもたちが年齢に関わらず学校に入ってくるようになったためである。このタタール人学校では、学年別最遅生活年齢は、どの学年でも、ロシアの普通の学校に比べれば高い。(表5参照)2年生には10歳以上、3年生には11、12歳以上、4年生には13、14歳以上の子どもがいるという具合である。学校によっても様子は違ってくる。調査者の勤務する学校では比較的高年齢の生徒が学んでいる。全学校、全クラスの生徒数分布は、13歳に13%、14歳に31%、15歳に17%である。27番学校ではその他のタタール人学校よりもかなり低く、12歳以下である。ところが、48番学校では12.5歳以上、16番学校では13歳以上になっている。

高学年では、低学年よりも生徒数が減少する。学校別平均生徒数は、1年生は30人、2年生では25人、4年生や7年生になると10から12人である。貧農は、学校を早めに止めてしまう。その結果、高学年では、事務職員の子どもの数が増えている。

調査者たちは、「このような不正規な状態は、近いうちに改善されなくてはならない」と主張する。別のことばで言い直せば、調査者たちは、貧困層が学校教育を受けられない困難な経済状況が改善されるべきことを主張していることになる。

表5 学年ごとにみる年齢別生徒分布(%)

|     |    | 2年生   | 3年生   | 4年生   | 5年生   | 6年生   | 7年生    | 生徒比率 |
|-----|----|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|
| 8歳  | 男子 | 5.27  |       |       |       |       |        | 1%   |
|     | 女子 | 8.33  |       |       |       |       |        |      |
|     | 合計 | 6.80  |       |       |       |       |        |      |
| 9歳  | 男子 | 18.40 | 1.76  |       |       |       |        | 3    |
|     | 女子 | 14.58 |       |       |       |       |        |      |
|     | 合計 | 16.49 | 0.88  |       |       |       |        |      |
| 10歳 | 男子 | 13.13 | 12.28 | 2.13  |       |       |        | 8    |
|     | 女子 | 12.50 | 13.44 |       |       |       |        |      |
|     | 合計 | 12.92 | 12.96 | 1.06  |       |       |        |      |
| 11歳 | 男子 | 23.70 | 22.80 | 4.26  | 3.7   |       |        | 7    |
|     | 女子 | 18.75 | 29.55 | 4.55  |       |       |        |      |
|     | 合計 | 21.22 | 26.17 | 4.45  | 1.85  |       |        |      |
| 12歳 | 男子 | 10.52 | 31.58 | 23.40 | 14.80 |       |        | 16   |
|     | 女子 | 12.50 | 20.45 | 18.18 | 15.00 |       |        |      |
|     | 合計 | 11.52 | 26.01 | 20.90 | 14.90 |       |        |      |
| 13歳 | 男子 |       | 21.00 | 27.66 | 29.63 | 5.26  |        | 13   |
|     | 女子 |       | 25.00 | 31.80 | 25.00 | 7.70  |        |      |
|     | 合計 |       | 23.00 | 29.73 | 27.31 | 6.48  |        |      |
| 14歳 | 男子 |       | 7.00  | 29.80 | 40.74 | 52.63 | 40.00  | 31   |
|     | 女子 |       | 11.40 | 34.00 | 40.00 | 30.77 | *28.57 |      |
|     | 合計 |       | 9.18  | 31.79 | 40.34 | 42.70 | 39.48  |      |
| 15歳 | 男子 |       | 3.50  | 8.51  | 7.40  | 21.00 | 60.00  | 17   |
|     | 女子 |       |       | 6.80  | 15.00 | 38.46 | 28.57  |      |
|     | 合計 |       | 1.75  | 7.65  | 11.20 | 29.23 | 42.30  |      |
| 16歳 | 男子 |       |       | 2.13  | 3.70  | 10.53 |        |      |
|     | 女子 |       |       | 4.55  | 5.00  | 15.40 | 14.3   |      |
|     | 合計 |       |       | 3.34  | 4.35  | 14.96 | 7.2    |      |
| 17歳 | 男子 |       |       | 2.7   |       | 10.53 |        |      |
|     | 女子 |       |       |       |       |       | 14.3   |      |
|     | 合計 |       |       | 1.35  |       | 5.26  | 7.2    |      |
| 18歳 | 男子 |       |       |       |       |       |        |      |
|     | 女子 |       |       |       |       |       | 14.3   |      |
|     | 合計 |       |       |       |       |       | 7.2    |      |

出典)『児童学』1930年第2号、273ページ

注)合計欄の記入のなかったもの、および男子もしくは女子の値がそのまま記入してあったものを修正した(表中、ゴシック体)。また、誤植と思われる数字を1カ所修正した(表中、\*印)。

学校や教師は「補充クラス」などに注意を向けることが必要であると調査者は指摘し、さらに、次のような具体的な提案をする。

- 両親や住民とともに広く活動すること、
- ゼロ学級（ ）を組織すること、
- 遅進児クラス（ ）を組織する、
- 知的障害者クラス（ ）を組織すること、
- 春季入学（ ）
- 子どもに履き物を保障すること、
- 学校付属寄宿舎（ ）

中途退学を主要には学力問題と見なして、対策が立てられていることがわかる。

様々なクラスと学校における子どもの最瀬知能水準と平均知能指数に関する調査は、次の表のようにまとめられる。(表6 参照)

表6 学校別平均知能指数

| 学校名   | 男子生徒平均 | 女子生徒平均 | 学校平均  |
|-------|--------|--------|-------|
| 27番学校 | 92.80  | 93.50  | 93.20 |
| 48番学校 | 91.70  | 91.80  | 91.70 |
| 16番学校 | 84.88  | 87.40  | 86.14 |
| 6番学校  | 93.50  | 88.00  | 90.60 |
| 全学校   |        |        | 90.41 |

出典)『児童学』1930年第2号、274ページ

様々なクラスと学校における子どもの最瀬生活年齢、最瀬精神年齢、平均知能指数に関する調査は、次のようである。(表7 参照)

表7 学年別知能指数

| 学年 | 男子    |       |       | 女子    |       |       | 全体    |       |       |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
|    | 生活年齢  | 精神年齢  | 知能指数  | 生活年齢  | 精神年齢  | 知能指数  | 生活年齢  | 精神年齢  | 知能指数  |
| 2  | 11.00 | 9.40  | 85.33 | 11.00 | 9.93  | 87.40 | 11.25 | 9.96  | 86.37 |
| 3  | 12.02 | 40.40 | 89.18 | 12.02 | 10.92 | 89.83 | 12.02 | 10.66 | 89.50 |
| 4  | 12.96 | 11.44 | 89.18 | 13.34 | 11.50 | 86.08 | 13.15 | 11.47 | 87.63 |
| 5  | 13.53 | 12.87 | 92.00 | 13.85 | 12.95 | 91.00 | 13.69 | 12.91 | 91.50 |
| 6  | 15.03 | 13.85 | 92.77 | 14.87 | 13.90 | 92.97 | 14.95 | 13.88 | 92.87 |
| 7  | 14.60 | 14.50 | 96.00 | 15.00 | 14.50 | 93.60 | 14.80 | 14.50 | 94.80 |
| 平均 | 13.19 | 12.77 | 90.74 | 13.35 | 12.30 | 90.15 | 13.27 | 12.54 | 90.45 |

出典)『児童学』1930年第2号、277ページ

これを見ると、先のツングースの調査および後述のチュバシの調査と異なり、年齢によって知能指数の低下が起こっているわけではなく、むしろ平均に向かって向上していることがわかる。

## 6. チュバシ調査

児童学の遠征調査の他に、民族調査は、心理学者によって各地で行われていたようであ

る。彼らが、児童学者を自認していたかは定かではない。

1917年にチュバシ人労働者の識字率は20%であったが、1931年には85%となっている。

1928年末に、ペトロフの『ピネー＝シモン法によるチュバシ人の子どもの知的発達の研究の経験』が出版された。この本には、チュバシ共和国のチェボクサリ郡に住むチュバシ人の子どもに関する調査結果が紹介されている。以下、調査結果は、チュバシ自治共和国学術研究所児童学・教育学教室主任エフィモフの手になる書評から重引するので、正確さを欠くところがある。しかし、この書評からでもおよその傾向をわれわれは理解することができる。

児童学遠征調査と時を前後することになるが、調査は、1926年と1927年の夏に実施された。この活動には、教員養成中等専門学校の教師と生徒が参加した。ピネー＝シモン法による子どもの知能発達の調査と、文化人類学的調査が実施され、環境に関するデータも集められた。また1927年には、子どもの医学的調査も行なわれている。

ペトロフは、非常に率直に「チュバシ人のこどもは遅れている」、あるいは、「発達の劣った子どもがいる。両親は子どもを全く学校に預けない。学習の能力が無いと信じていて、家事を学ばせる方が目的にかなっていると考えている」と記述している。ペトロフの測定した、チュバシ人の子どもたちの知能指数は以下の通りである。(表8参照、ペトロフ、58ページ)

表8 年齢別にみる知能指数平均値

| 年齢 | 男子  | 女子  |
|----|-----|-----|
| 3歳 | 110 | 102 |
| 4  | 99  | 110 |
| 5  | 93  | 91  |
| 6  | 87  | 87  |
| 7  | 87  | 90  |
| 8  | 87  | 84  |
| 9  | 87  | 81  |
| 10 | 89  | 80  |
| 11 | 85  | 76  |
| 12 | 79  | 72  |
| 13 | 75  | 72  |

出典)『児童学』1931年第1/2号、126ページ

この結果から、ペトロフは、大部分の子どもたちのために「特殊学校や特殊学級( )」を組織しようと提案した。

8歳のうち「大部分の子どもたちは、6歳以下の水準にあるので、いかにしても、大衆学校( )でうまく学べない。そこで、チュバシ自治共和国国民教育機関は、遅れた子どもたちのために特殊学校や特殊学級を組織する道を選ばざるをえない。これなくしては、国民共通教育( )は導入不可能である」(ペトロフ、61ページ)。

書評を書いたエフィモフの計算では、ペトロフのいう特殊学校に行かねばならぬ子ども(8歳の子どものうち6歳以下の発達水準にある者の割合)を計算してみると、男子の14%、女子の17%に相当する。



ここで注目すべきことだが、ペトロフは、チュバシ人の子どもたちの大多数のが示した「遅れ」、「低水準」の原因を、「現在の社会・経済的条件」によると説明していることである。

その後、1931年の時点で、エフィモフは、次のような批判を投げかける。ペトロフのいう「現在の社会・経済的条件」とは「すなわちソビエト政権が作り出している条件、共産党に指導されている労働者の条件」のことである。こう指摘し、さらに、ペトロフは「反革命の視点に立っていて、労働者の子どもたちの実際の発達条件を理解できないし、理解しようとも望んでいない」と追いつめる。しかし、このような批判自体が、図らずも、民族調査を誰がなぜに恐れていたかを物語っているのではなからうか。

エフィモフは、ペトロフのことを、いわゆる「劣った民族（ ）」に対する「脳の建築術（ ）という腐った学説（ ）」を復活させようと試みていると、口を極めて非難する。エフィモフにとっては、少数民族を研究したデータを「西欧諸国の文化・生活データ（ ）を基礎に作成された標準」と比較することまでもが、問題ある行為とみなされた。

エフィモフの指導する児童学・教育学研究室は、1930年11月2日に、チュバシ教育人民委員部教育学教室が改組されてできあがった。

1931年の7ヵ月で集めたデータは、反宗教教育、国際教育、コルホーズに関する生徒とピオネールの意見、労働に関する生徒の意見、肉体労働への子どもの参加、子どもの技術的見識、ことばのデータであった。

ここで気づくことだが、エフィモフの研究室では児童学のテーマが、知能研究や実態調査から、労働教育やイデオロギー的なもの（当時提起された「新しい人間像」）へと変化していることである。エフィモフの児童学・教育学研究室には知能の研究や、能力発達と環境との関係にかんする研究など一片のかけらもなくなってしまっているのである。

1931年時点における反応は、すでに共産党中央委員会では児童学を批判対象として確定していた。それに沿ってエフィモフはペトロフを非難したと理解でき、また、エフィモフの児童学実践もすでに批判に沿って修正されたものであったとみなせよう。

## 7. 評価

この時期の児童学遠征調査をどのように評価すべきか。ソビエト心理学理論史の研究者バルジナーは、以下のように結論を下している。

第一に、非ロシア文化地域に対する初期の児童学遠征調査は、文化の境界を超えて欧米の心理学の標準的な道具が不適合であることが示された。

第二に、発達の強調は、これらの研究計画の大多数の中に現存する。ある場合には（コーンの計画）体系的な視野の中に社会の文化的で歴史的な発達についての一連の統合した知識が入っている。つまり、両親の信仰、思想、育児行為といった心理学的知識である。

バルジナーの指摘と、事実とは若干ずれている。確かに、欧米の心理学がソ連の実態にはそのまま通用しないものであったのだが、むしろ能力発達の計画化に児童学者たちの視点が移っていき別の道が探られ始めたということであろう。

同一地域の同一民族でも、時代によって異なる結果を示すものである。アルタイのオイロートを対象にした1929年のザポロージェッツの調査と、1966年のゲーロワたちの調査を

比較してみると、家族が都市に定着し、子どもが学校に通うようになれば、少数民族もロシア人と変わらぬ心理状態を表すように変化したのである。

これは少数民族調査ではないが、ウクライナのハリコフ労働研究所のシュルキンが1929年に、普通教育学校生徒の知能と家庭背景との関係について調査を報告している。おもしいのは、欧米と同じような指標が用いられたので、比較が可能であった。

比較を試みた、ジョンソンによると、「革命後数年たったウクライナの大都市の子ども」の知能の職業的階層は、アメリカやイギリスと全く似ていた」と判断される。さらに、「知能の職業的 (occupational) 差異は、地域的 (sectional) 差異よりもかなり大きい」と指摘されている。

一般的に言えることは、どの民族をとっても、文化・生活の条件が精神発達に決定的な影響を及ぼすということだ。文化・歴史学派が立てた仮説のように、とりわけ学校教育の期間と質による影響は大きい。本文中の表 2、7、8 を見比べてみても、知能指数は、民族に固有なものではないことが分かる。文化・生活の条件が不利ならば、知能指数もまた年齢を追うにつれ低下していくのである。このように、ソビエト児童学は、発達における環境の様々な役割を解明していた可能性がある。

ソビエト児童学が発達の科学の構築を試み、とりわけ質的な飛躍を特徴付けながら様々な能力の発達を規定しようとした試みは、高く評価できよう。ましてや、児童学批判のいうように、児童学が遺伝を重視して生物学主義に塗りつぶされていたのではないことは、少なくともはっきり明言できることだと考えられる。

## 8. 児童学の偏向とは何であったのか

駒林邦男氏が、昨年 (1997年) の日本教育学会大会シンポジウムにて、ソ連教育史像について詳細な報告をされ、その後、児童学批判の部分を取り出して論文にまとめられている。その中で、筆者を含む何人かの研究者が検討対象にあげられている。それに反論をする責任があると思われるので、一定の見解を述べてみたい。

### 児童学批判について

1936年7月4日の共産党中央委員会の下した決定『教育人民委員部の系統における児童学的偏向について』、いわゆる『児童学批判』までには、本稿等で検討した児童学の民族調査の時期の後に、1932～36年というもう一時期が挟まるだろう。その間の研究は、アルヒーフの検討など詳細に詰める必要がある。しかし、対立の大枠は1928～31年の児童学の検討からおおよそ推測できるものであって、今後研究を進めてみてもそれほど外れることはないと思筆者は考えている。

児童学が指摘したのは、能力発達の決定要因が生物的要因ではなく、発達段階に応じた適切な環境、健康状態から教育条件までに至る総合的な社会環境にあるということであった。したがって、児童学の分析が加えられると、能力発達の遅れは、保健・衛生条件の改善や教育条件の整備、それを支える経済状態に問題があることが明るみに出されてしまうのである。図らずもエフィモフがペトロフに投げかけたことばのように、現行の社会・経済的条件の不十分さを描くことは、ソビエト政権、共産党の指導、革命、それらを否定することにつながる。児童学批判の争点は、生物的要因を認めるか否かにあったのではない。

所伸一氏は「スケープゴート」説を提唱し、ジョラフスキーや渡辺健治氏と同様に、児童学批判は共産党中央委員会と教育人民委員部の「教育政策の不振の責任を児童学に転嫁する」ものであったと判断している。筆者は、教育政策だけにとどまらず、共産党の政治、革命の質そのものを問うものとなっていたと判断している。心理学理論研究者のトーマスは、「成績の差異を環境要因に還元することは、ソ連体制の罪責と解されざるを得なかった。ところが遺伝理論の説明も許されなかったのだから、テスト結果だけが誤りであるとしか言えなかったわけである」と示唆している。もっと正確に言えば、テスト結果だけでなく、テストそのものが誤りであると言う道しか、共産党中央には残されていなかったのである。

駒林邦男氏は、いわゆる児童学批判、つまり「決定：児童学的歪曲」は、「児童学の理論と実践についての正確な現状認識に基づいていたものではない」こと、および「決定：児童学的歪曲」の基本性格は、「学問的問題の非学問的問題へのすり替えである」と結論付けている。このすり替えは、「知的『正統』性から見た異端者に対する懲罰の見せしめ、児童学を例として、科学を政治の奴婢としてしまうため、である」としている。

筆者は、共産党中央委員会の児童学決定は、「児童学の理論と実践についての正確な現状認識に基づいていたものである」と考える。すなわち、児童学のもたらした正確な現状認識は政治批判に行き着いてしまうものであるという（論理必然性）が、1936年時点で共産党中央に正確に認識されされたのである。しかも、全国に相当数の児童学者がいて活動を展開している最中である。したがって、この政治的問題を何らかの形で葬り去る必要が出てきた。すなわち「非学問的問題の学問的問題へのすり替えである」。共産党組織の意を体現した三流学者（クーレクの言う「リンチ仕掛人」）たちが登場し、大衆の誰でも分かるような「児童学 = 生物学的決定論 偏向」という「理論的批判」を加えたのである。このような批判は、批判にも当たらない、研究者にとっては百も承知の全く問題にならない理論であった。

駒林氏の指摘するように「決定：児童学的歪曲」のわずか2カ月後に「エジョーフチナ」（大テロル）と呼ばれる肅正が始まるが、翌年1937年には教育人民委員ブーブノフともども教育行政関係者300人が逮捕され収容所送りとなる。ブーブノフは、教育予算の増額を主張して、銃殺されたといわれる。1937年時点になると、もはや「偏向」は教育人民委員部の一部の児童学者ではなく、教育人民委員部そのものと見なされたのである。『児童学批判』の起こりは児童学の理論にあったのではなく、政治的な問題に発していたとみるべきであろう。

#### 近代化をめぐる

では、児童学批判こそが歪曲であったとすると、ソビエト児童学には問題がなかったのだろうか。

筆者は、かつてから、ヴィゴツキーやルーリヤは近代化論者であつと指摘していた。ソ連邦政府のとった少数民族に対する基本的社会政策は、伝統的な文化に対抗して、「より近代的な」都市的な生活様式を「教える」ことであった。ソビエト児童学は、いわゆる近代化路線に沿って「文明開化」をめざし、大いなる希望と使命感をもって共産党の政策を意図的に実践しようとしたにすぎない。環境の改善をかけて共産主義の実現を希求して

いたようにさえ見える。

駒林氏は、筆者ならびに所伸一氏が「近代化」の用語を使用していることを非難しておられる。その理由は、「近代化」概念は、その内包が明瞭でなく、その外延が伸縮自在であるからだとされるが、この非難はほとんど意味がない。その通りだからである。そして、そう言ったとしても、何の意味もない。

駒林氏は、スターリン主義の急進的「工業化」、「社会主義的工業化」は、「近代化」の側面をもつと認めている。しかし、日本の「近代」天皇制国家以上に「非民主性を刻印されたソビエト社会主義共和国連邦という国家体制」であったので、「近代化」政策というだけでは足りないと言っている。つまり、浜内謙氏が言うように、「民主化」と「近代化」との両者を問題にしなければならない、と駒林氏は言いたいようである。

また、駒林氏はヴィゴツキーは、スターリン主義の知的「正統」性から距離があったので、何ら批判される立場にはないと判断されているようであり、それをもってヴィゴツキーが近代化論の立場にあったことを指摘した筆者を批判されたようである。

だが、筆者は、スターリンの時代は「民主化」を欠いた「近代化」であるという認識を前提にして論を展開しており、「民主化」を無視しても「近代化」があればよいという論を述べた覚えはない。所氏もそうであろう。名指して批判を受けなくてはならないほど、駒林氏と見解の相違があるとは思えないのである。

むしろ、「民主化」を待たなければ「近代化」は生じないのかと問い返せば、「近代化」の概念を使用するなど言う方に無理があるように思われる。

近代化の概念を、教育学に関連する要素で、筆者なりに定義しておく。近代化は、産業化によって生じる一連の社会的な変化である。生産の目的が、自給自足から商品を生産して利潤をあげることに変わる。生産の形態は、大量生産を可能にする大工業に変わる。生産と消費を遂行する安定した場として、国民国家が形成され、学校教育や行政機関など様々な国家的制度が作られる。生産を発展させ、社会的制度を維持するために、諸個人の能力、とりわけ抽象的なシンボル操作の能力が開発される。その結果、諸個人は、土地や家族から自由になり、能力の発達も遂げられる。諸個人が能力を発揮するために（もちろん権利としても）民主化が必要となり、民主化された社会では能力によって人間は評価されるようになる。

ヴィゴツキーは、このような近代化を推し進めようとしたと、私は判断している。

#### ヴィゴツキーの環境決定論

駒林氏は、「ヴィゴツキーの『文化・歴史的理論』を『能力の環境決定論の一種』と性格づけるのは誤りである」と、はっきりしたことで筆者を批判しておられる。その根拠は、ヴィゴツキーは「発達の内的論理」を否定していたと速断してはならず、ヴィゴツキーは発達の「内的過程」が自分固有の「内的論理」を有することを強調していたからであるとされる。

筆者は、ヴィゴツキーが発達の内的論理を否定したとはどこでも述べてはいない。能力の環境決定論が全て「内的論理」を否定していると速断することこそ誤りであろう。駒林氏の論理は、ルビンシュテーイン派がレオンチエフ派の発達論、すなわちヴィゴツキーらの文化・歴史理論を批判するために構築したトリックを使用しているにすぎな

い。『児童学批判』に対する過敏な反応であろう。心理発達に「内的論理」が存在することは素人でもわかり、正面切って「内的論理」を否定するような研究者がいるとは思われない。このような論理を持ち出すのは、生産的ではないだろう。

普通は、環境決定論と述べた場合、対極には遺伝決定論が想定されている。その論は、100パーセント遺伝で決まるとか環境で決まると言う意味ではない。もしそのような定義をしてしまうと、言葉自体が死語になってしまう。そのレベルの論はすでに決着が付いているのであって、話をそこまで戻す必要などない。そうではなくて、遺伝か環境か、そのどちらが発達の主導原因になるかということが問題になっているのである。ヴィゴツキーは、遺伝ではなく、環境に発達の決定的な要因を認めていたということである。なかでも、言語を使用することで人間は質的に高度な発達を遂げられること、また学校教育はそのような発達を促進するということ、そのような発達の「内的論理」を解明すること、すなわち必要な時期（段階）に適切な文化が関わってさらに展開を遂げるという法則を解明することが児童学の課題である、とヴィゴツキーは考えていた。筆者はそう理解している。

## 注

福田誠治「ソビエト児童学と民族問題：ヴィゴツキーとルーリヤの文化歴史理論の形成」  
竹田正直編『1930年代におけるロシア教育の歴史的総合的研究』科学研究費補助金研究成果報告書、1995年。これは、中央アジアの調査を扱っている。

福田誠治「ソビエト児童学が描いた民族問題」川野辺敏監修『ロシアの教育：過去と未来』新読書社、1996年。これは、アルタイの調査と1966年の追跡調査を扱っている。

、1997、No.3.

シュチレルマン「ウズベク人の子どもの生活と健康」『ウズベキスタンの医学思想』1927年、126ページ。引用は、クーレク「1920年代ソ連邦の住民発達の精神的、知的および身体的な水準に関する児童学と心理技術学」『心理学誌』1997年第3号、152ページより重引。

この表現は、ゴッダートが精神薄弱の家系をたどったときの表現を思い起こさせる。また、将来展望については、現代のアメリカのマイノリティの分析にも類似している。

シュチレルマン「ロソリーモ簡易式によるタシケント市のウズベク人生徒の心理学的研究資料」『ウズベキスタンの医学思想』1928年、第4号、50ページ。引用は、クーレク、同上、より。

クーレク、は彼のことを有名なイデオロギーの「リンチ仕掛人（ ））」と呼んでいる。同上、153ページ。

レヴェントゥーエフ他「児童学における強大な排外主義に対抗して」『児童学』1932年第3号、47ページ。

ヴィゴツキー「少数民族の児童学に関する科学的研究活動計画の問題」『児童学』1929年第3号、376ページ。

、1929

ヴィゴツキー「少数民族の児童学に関する科学的研究活動計画の問題」『児童学』1929年、第3号、370ページ。

同、375ページ。

同、376ページ。

労働者の大学進学を支援する、大学に付属した予備学部。

シェポヴァーロフ「バイカル北部のツングースの子どもたちの社会・生活環境」『児童学』1930年第2号、172ページ。

同、178ページ。

同、186ページ。

トゥーゼムとは、アルタイ人などトルコ系住民を指して用いられたことば。ここでは、ツングース人を含むアジア系住民を総称しているようだ。

ウーソフ「学校におけるツングースの子どもたち」『児童学』1930年第2号、188ページ。

同、190ページ。

ブラーノフ「ツングース人の子どもの行動研究資料」『児童学』1930年第2号、194ページ。

同203ページ。マイノリティの子どもたちが、学校で学ぶのに差が開いていく現象をどう解釈するかは、1960年代末～1970年代のアメリカでも問題になった。

グラナト、ザゴルジェリスカヤ「ブリアート=モンゴルにおける医学・児童学遠征調査」『児童学』1930年第2号、241ページ。

同、243ページ。

同、245ページ。

ラヴロフ - ビクチェンタイ「モスクワにおけるタタール人生徒の身体的発達」『児童学』1930年第2号、265ページ。

ビクチェンタイ、カリモフ「ピネー集団テストによるモスクワのタタール人生徒の知能水準」『児童学』1930年第2号、271ページ。

同、274ページ。

エフィモフ「書評、ペトロフ著『ピネー=シモン法によるチュバシ人の子どもの知的発達の研究の経験』1928年」『児童学』1931年第7/8号、128ページ。

「チュバシ自治共和国学術研究所児童学・教育学教室の活動」『児童学』1931年第7/8号、148ページ。

なおこのデータをもとに、エフィモフ「肉体労働への子どもの参加」が執筆され、『国民文化』1931年第2/3号に掲載されている。

Jaan Valsiner, *Developmental Psychology in the Soviet Union*, UK: Harvester Press, 1988. 第8章第6節。

M. Sirkin. The relation between intelligence, age, and home environment of elementary-school pupils. *School & Society*, 1929, 30, pp.304-308.

Donald M. Jonson, Applications of the Standard-Score IQ to Social Statistics. *The Journal of Social Psychology*, 1948, 27, pp.217-227.

駒林邦男「1930年代ソ連教育史像：研究の軌跡と「崩壊」後の現時点でのその検討」『日本教育学会第56回大会（1997/08/28）シンポジウム「冷戦期における社会主義教育研究は何を残したか」提案資料』

駒林邦男「『児童学的歪曲についての決定』（1936）の歴史的、心理学的検討：なぜ、ソ連共産党は児童学の理論と実践を総否定したか？」『日本大学工学部紀要』第39巻、第2号、1998年3月

所伸一「ソビエト児童学はなぜスターリンに弾圧されたのか」『教育史・比較教育研究論考』第17号、1994年。

渡辺健治「ソビエト児童学批判の分析：教育困難児問題を中心に」『東京学芸大学紀要』第1部門、35、1984年。

D. Joravskiy, *Russian Psychology: A Critical History*. Basil Blackwell, 1989.

トーム『心理学と社会』新曜社、1980年、65ページ。

・ ・ ・ ・ ・ ; ,1991, .4.